

世界化学年記念切手のデザインについて

2012年3月16日 化学切手同好会

化学切手同好会では世界化学年を記念しフレーム切手5種を12月1日付けで自主発行しました。フレーム内の絵柄はAからEまでの5種類です。デザインについて若干説明します。



1) 世界化学年の統一ロゴマークを使用

統一ロゴマークには使用規程があり、営利目的でないこと、世界化学年の理念に沿っている企画・事業であると認定されていること、とされています。マークには **a**、**b** の2タイプあります。デザインを、より単純にするため **b** タイプを使用しました。



2) 化学切手同好会 (英語名: Chemical Philately Study Group)

全てに記載。出来るだけ英語名称 (JAPAN付き) も入れました。

3) ロゴマークの色使いを全体に展開

ボトムに青を太巾で、トップに赤を細巾に入れました。

4) 書「世界化学年」

A, B, Cに使用。同好会会員の荒木恒夫氏 (東大理化卒) にお願ひしました。

世界化学年

5) 化学書 宇田川榕庵訳「舍密開宗 (せいみかいそう)」表紙

Aに使用。「舍密開宗」(1837~1847) は日本の近代化学の源流の書。

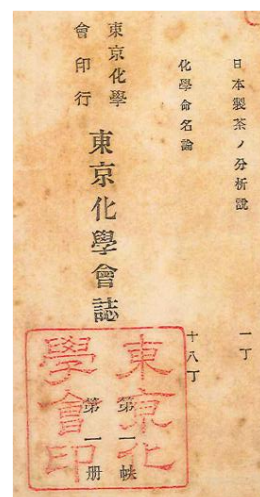
舍密は化学を意味するオランダ語 *Chemie* の字訳です (*参考)。



* 原著は英国の化学者ウィリアム・ヘンリーが1799年に出版した *Elements of Experimental Chemistry* を J・B・トロムスドルフが独語に翻訳・増補した *Chemie für Dilettanten* を、さらにオランダの Adolf Ijpeij が蘭訳した『依氏舍密』(1803)である。しかし、単なる翻訳ではなく Ijpeij による『依氏舍密広義』、スモーレンブルグ (F. van Gatz. Smullenburg) の『蘇氏舍密』などの他の多くのオランダ語の化学書から新しい知見の増補や、宇田川榕庵自身が実際に実験した結果からの考察などが追記されている。宇田川榕庵はこれらの出版に際し、日本語のまだ存在しなかった学術用語に新しい造語を作って翻訳した。酸素、水素、窒素、炭素、白金といった元素名や元素、酸化、還元、溶解、分析といった化学用語、細胞、属といった生物学用語は宇田川榕庵の造語である。

6) 「東京化学會誌 (東京化学会誌)」創刊号 (1880) 表紙 (部分)

Bに使用。表紙らしくないため廃棄して本体のみで製本所蔵される例が多い。今回は京都大学総合人間学部図書館の許可を得て写させて頂きました (*参考)。



* 現日本化学会の源流である東京化学会は1878に東大理化の第1回卒業生と在校生24人の集りで発足した。2年後この会誌を発行。「東京化学会誌」は1920年「日本化学會誌」、さらに1948年「日本化学会誌」に継続されたが2002年3月和文報文誌としての役割を終え休刊した。

7) 学会誌 「化学と工業」創刊号(1948)表紙(c)

Cに使用。現在に続く(統一日本化学会)の会誌創刊号。特に巻頭の「化学の時代来たる」(石川一郎初代会長)の記事が、戦後復興を化学の力だという時代の意気込みを現在に伝えています。

8) 揮毫「凄いぞ化学の底力」(d)より

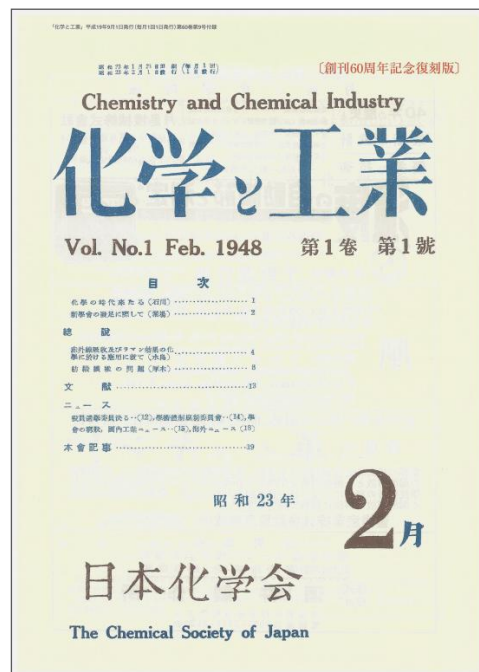
日本化学会副会長千葉泰久氏(宇部興産相談役、元副社長)の書より、Dの「化学の底力」と、Eの「力」に使用。国立科学博物館と当化学切手同好会が主催した、世界化学年記念化学切手展示会の「明るい未来、化学の力」コーナーのイメージを切手デザインに取り入れたいと、強くお願いして使わせて頂いたものです。

9) アルコール専売制度十周年記念切手シートタイトル(e-1)

Eの「化学」は、アルコール専売制度十周年記念切手e-2(*)のシートタイトル「化学知識普及運動」から化学だけ使用。

*日本の代表的な化学切手(1948年発行)である。切手デザインに化学式 C_2H_5OH

が堂々と登場している。世界で初めて化学式が登場した切手である。当同好会としても誇りの一枚である。最初、切手中央の工場図をそのまま使用しようと試みたが不可であった。次にシートタイトル「化学知識普及運動」が世界化学年の趣旨に通じることもあり使用を打診し、許可された。しかし試作では多数使用したが、字数が多いことや、現代ではやや直截的に過ぎることから、最終的に「化学」のみを顕彰として使わせて頂くことに落ち着いた。



c



e-1



e-2



d

10) 日本化学会のロゴマークの使用

C、Dに使用。ロゴマークfのCSJってなあに、という方も Chemical Society of Japan の略、ベンゼン環仲間の会、と聞けば納得して頂けるのではないのでしょうか。



f

なお、試作段階は全てはがき用額面50円切手、フレームのデザインは穏やかな「グリーン」で進めていましたが、同好会での最終議論で封書用額面80円切手での発行となり、それに伴って穏やかな「ブルー」の10連フレーム切手シートとなりました。

これらの切手ができるだけ多くの方に使われ市中に流れることで「(日本の)化学」がより身近なものになることを願っております。

以上文責 切手デザイン担当 新井和孝